

第 83 話 (66 頁) 遺産分け

ある父親にむすこがふたりいました。父親がむすこたちに言いました。

「わたしが死んだら、ぜんぶ半分に分けなさい。」

父親が死ぬと、むすこたちは遺産のことで、けんかになりました。ふたりは、となりの人に相談に行きました。となりの人はたずねました。

「お父さんは、どのように分けろと言ったんだね？」

ふたりは言いました。

「ぜんぶ半分に分けるようにと…」

となりの人は言いました。

「それなら、服はぜんぶ半分にさき、食器はぜんぶ半分にわり、家畜もぜんぶ半分に切るんだね。」

兄弟はとなりの人の言うことを聞いたので、手もとには何ものこりませんでした。

「そこまでするのか、って、驚き、あきれよ。遺産相続をめぐる争いは世の常とはいえ、極め付きの、骨肉相食む争いだ。」

「ぜんぶ半分に分けなさい、と父親が遺言を残していた。母親はその前に亡くなっていたと推察されるけど、息子二人の選んだ分け方は、もちろん、父親の真意とはかけ離れているし、だれ一人望んではいなかった。」

「兄弟二人では互いに譲らず、にっちもさっちもいかなかった。それで、『となりの人』に相談するしかなかった。どっちも、相手に何一つ渡したくなかったんだらう。」

「きっと『となりの人』も困ったと思うよ。相談相手というより、調停者か審判官、あるいは裁判官の役回りになっちゃった。」

「なんでも一つ一つを半分にしていきなさい。こういう非現実的な裁定はないだろう、と悪意さえ『となりの人』に感じたんだが…」

「違うな。ここまで宣告すれば、さすがに二人とも少しは頭を冷やすだろうと思って言ってみた。そうしたら、考え直すどころか、真に受けて、そのまま実行してしまった。」

「それぞれ半分に、服は裂き、器は割り、家畜は切る……。そこまで例示して具体的に言われたら、途中で、こんなことを続けてはいけない、と気付くはずなのに、そうはならなかった。」

「二人とも馬鹿正直で、機転の利かない石頭だった。見方によっては、それほど猜疑心と独占欲が深かった。」

「紙幣やコインも、一枚、一個ずつ、切っていったのかな。イメージ的にはそういうことになる。」

「いや、お金は残してはいなかったのではないか。」

「手もとには何も残りませんでした。この結びが、実にぴたっと決まっている。二人が茫然自失としている様子が浮かぶようだ。」

「それで、自分たちの非に遅ればせながらも気づいてくれたら、まだ救いがある。」

「子供たちの読後感は、想像がつく。『絶対おかしいよ』『途中で変だと思わなかったら、もっとおかしい』なんて、ね。」

『こんな兄弟にはなりたくない』『死んだ父親がかわいそうだ』といった声も出るかな。」

「この話は、一つ一つの文が短くて、テンポがいい。このまま紙芝居になるよ。」

「そして、子どもたちが、こんなあほなことが…と笑い声を上げる。授業の息抜きに使える気もしてきた。」